
CVR (ボイス・レコーダ) in ペちゃくちゃ秋刀魚杯

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボイス・レコーダ
CVR in ペちやくちや 秋刀魚杯

【Nコード】

N0481N

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

「ペちやくちや 秋刀魚杯」（ライス先生企画）参加作品です。

地の文禁止、会話文のみ、の企画です。

墜落を目前にする、旅客機のコクピット内の息詰まる会話。生々しく記録された人間模様……。

内容が内容だけに、投稿ちよっとヤバいかも知れません。会話はテキストですし、完全なフィクションです。

その点も含め、どうかご容認、ご容赦ください。

【華】

「JAN056便。管制塔どうぞ」

「……………」

「機長。与圧が異常に低下しています」

「クルーに目視で機体の異常を確認させる」

「はい。機長」

「機長。フライトレベル（巡航速度）を維持できません。エンジントラブルでしょうか」

「違う。制御系統か機体の異常だ。操縦に専念しろ」

「ああ機長。アナンシエータが異常を検出！ ……どうしたらいいの？」

「うるさい。わかっている。お前がパニックになってどうする！」

「機長。スコワーク（機体の不具合）みたいです」

「そんなこと、今となってはどうでもいいことだ。しっかり操縦桿を保持しろ！」

「あなた！ 早く指示してよ。早く！ どうすればいいのか」

「あなたはやめろ！ ここは機内だ」

「はっ、はい機長」

「機長。管制官に代替空港を……………」

「ここまでできたら、空港など関係ない。今を生き延びるか否かの戦いだ」

「あなた！ ちょっと待ってよ。そんな諦めたような言い方ってないでしょー！」

「だから、あなたはやめろ。俺は機長、お前は副操縦士だ」

「はっ、はい機長」

「ああ機長。ラダーの制御が利きません。機体を水平に保てません。一体どうしたらいいの！」

「おい！ 駄目だ、駄目だ。失速するぞ。ヘッドウィンド（向かい風）を確保しないと駄目だ」

「その方位がわからないって言うてるのよ！馬鹿になってるし！」

「ばっ、馬鹿だと！ 俺のこと、馬鹿と言ったか！」

「方位計が馬鹿になってるって言うてるのよ！ あなた馬つ鹿じゃない？」

「ほら！ やっぱり俺のこと馬鹿って言ったぞ！ 間違いなく言ったぞ！」

「何子供みたくないなこと言うてるの？ どうでもいいから早く方位を指示して。わかんないから」

「わかった。ってどっちが機長だ！」

「あなたねえ。夫婦喧嘩してる場合じゃないっての！」

「むううう。あっちだ。方位202（南南西）を維持せよ」

「はい。機長」

「おい。デイセンド（急降下）だ！」

「はい。機長」

「早くヘディング（機首方向を）下げろ！」

「はい。機長」

「おまえ。早くヘディング下げろっての！ 本当に失速するぞ！」

「はい」

「この野郎！ 本気でやれ！！」

「……あなた。もしかして私のこと『野郎』って言った？」

「言っていない。言っていない。ゼツタイ」

「もう許さないからね！ 冗談で言っていないわよ！」

「はっはい。ううう。俺、機長だぞ……早くヘディング下げて……」

……ちようだい。失速して墜ちるう」

「場合によつては、緊急着陸だ」

「機長。地形が複雑で、ターゲット（着陸時のスピード）がわかりません」

「少しクライム（上昇）だ」

「ぶぶっ、何で？ あなた！ 失速するわよ。このスピードだと

……」

「早くクライムだ。方向舵が利かないから山間は危険だ」

「旋回で衝突を回避するわ。それでいいでしょ」

「駄目だ！ 無理だ！」

「私じゃ無理だつての？」

「おい。俺は機長だ。言うことを聞け！ 早く。聞いて……ちよ
うだい。」

「いや！ いやよ！」

「あつ！ あぶなつ！ 脇見るな！ あぶねえ。基本だぞおま
え！ 早くクライムだ！ 命令だ！」

「いや！ 操縦桿に触らないで！ わかった。わかった。言うこ
と聞くから、あなた操縦桿に触らないで」

「早くしろ。衝突するぞ」

「触らないで！ 今やつてる！」

「あーあ……操縦桿も馬鹿になった。もうだめ」

「おい！ また馬鹿と言ったか？ 馬鹿って言った奴が本当の馬
鹿だぞ！」

「あんたは小学生か！」

「おい！ 俺のこと、あんたつて言ったか？」

「言つたわよ。悪い！？」

「結婚以来、俺はあんたなんて言われたことないぞ！」

「機長。あなた。おかしいよ……」

「おかしもかかしもあるか！ ボケっ！」

「きーっバカバカバカ！」

「わっわっわ。脇見するな！ あぶねえから。お願いだ」

「もう駄目かもわからんな……」

「機長。もう機体のダッチローリングを止められません！」

「コンソール（機長席）へ座れ。操縦を交代する」

「ちよつと待って！ あなた！ 何する気！」

「不時着しかない……」

「こんなところで。あの山間の平面？ ランウェイ（滑走路）が短すぎるわ。激突するわよ」

「俺たちにはもう、論議している余地はないんだ……」

「……」

「あなた。愛してる……」

「俺もだ」

「私に最後まで操縦させて。最後までいかせて」

「……よし、分かった。逝くときはおまえと一緒にだ」

「ギヤ（車輪）を出しますか？」

「ギヤをどうするかって言ったか？」

「出しますか？」

「いや……短かすぎるし……衝撃を分散させるほうがいい。もう運を天にまかせる」

「あなたあ」

「おまえ」

「ああもうだめ……コントロールできない」

「おい！ ウェイが短いぞ！ 侵入が高すぎる。山にぶつかるぞ！」

「ぞ！」

「ああああ」

「ダメだダメだ！ 高い高い！ ゴーアラウンド（着陸復航）だ！ フルスロットルで上げる！」

「はい！ パワーパワー！！ ムリ！ ムリ！ 立ち上がれない！ 失速するう！」

「パワーパワー！！ 頑張れ！ 頑張れ！ B737機！」

「パワーパワー！！ お願い助けて！ B737！ お願い！ B

737！お願いだから助けて！」

「パワーパワー！」

「パワーパワー！ お願い！」

「ああああああああ」

「きやああああああ」

「君。このCVRを国土交通省の事故調査委員会にまともに提出できると思うか？」

「……このままだと、かなり問題になりそうですね」

「プレス（マスコミ関係）にも公表することになっている。こうなったら全く別なものに差し替えるしかない」

「それは無理です。社外にはバレないと思いますが、一部の社員はJAN056の機長や副操縦士を知っています。彼らを欺くことはできません」

「そうか。ああそうだ。それならまずいところを切って、うまくわからないように編集することはできないか」

「それは可能です。やってみましょうか」

「時間がない。くれぐれも、編集でカットしていることがばれないように頼む」

「わかっています。関係のプロを知っていますから、つなぎは万全で

す。それなら完璧な記録にできると思います」

「『思います』ではいかん。ともかくヤバそうなところは微塵も残すな。二人が夫婦であることも聞いた者に悟られてはダメだ」

「わかりました」

「えー皆さん。このたびは大変な事故を引き起こしてしまい、お詫びの言葉もございません」

「機体が真っ二つになりながら、墜落時の犠牲者が一人も出なかったことは、まさに奇跡中の奇跡というほかありません」

「現在、乗員乗客の殆どの方が病院で手当てを受けられています
が、今のところ重体者の報告もありません」

「それでは、ボイスレコーダ C V R のほう、再生させていただきます。速記担当の方はよろしくご準備ください」

「では、再生します」

「…うるさい。わかっている。お前がパニックになってどうする！
…あなた！早く指示してよ。早く！どうすればいいの？
…あなたはやめる！…あなた！ちよつと待ってよ。そんな諦めたよ
うな言い方ってないでしょ！…だから、あなたはやめる。…馬鹿
鹿になってるし！…ばつ、馬鹿だと！俺のこと、馬鹿と言ったか
！…あなた馬鹿じゃない？…ほら！やっぱり俺のこと馬鹿
って言ったぞ！間違いないと言ったぞ！…何子供みたいなこと言
ってるの？ どうでもいいから早く方位を指示して。分かんないか
ら…わかった。ってどつちが機長だ！…あなたねえ。夫婦喧嘩
してる場合じゃないっての！…おまえ。早くヘディング下げろつ
ての！…この野郎！本気でやれ！！…あなた。もしかして私の

こと『野郎』って言った？ …… 言ってない。言ってない。ゼツタイ
…… もう許さないからね！ 冗談で言っていないわよ！ …… はっはい。
ううう。俺、機長だぞ。早くヘディング下げて。ちようだい。失速
して墜ちるう …… 駄目だ！ …… 私じゃ無理だったの？ …… おい。俺
は機長だ。言うことを聞け！ 早く。聞いて。ちようだい。…… い
や！ いやよ！ …… あっ！ あぶなっ！ 脇見するな！ あぶねえ。
基本だぞおまえ！ …… いや！ 触らないで！ わかったわよ。わか
った。言うこと聞くから …… 触らないで！ …… あーあ。もうだめ
…… おい！ また馬鹿と言ったか？ 馬鹿って言った奴が本当の馬
鹿だぞ！ …… あんたは小学生か！ …… おい！ 俺のこと、あんたっ
て言ったか？ …… 言ったわよ。悪い！？ …… 結婚以来、俺はあんた
なんて言われたことないぞ！ …… あなた。おかしいよ …… おかしも
かかしもあるか！ ボケっ！ …… きーっ！ バカバカバカバカ！ ……
わっわっわ。脇見するな！ あぶねえから。お願いだ …… ちよつと待
って！ あなた！ 何する気！ …… あなた。愛してる …… 俺もだ
…… 最後までいかせて …… いくときはおまえと一緒にだ …… 出しますか
？ …… あなた …… おまえ …… ああもうだめ …… ああ …… あああああ
ああ

「……………」
「……………」

「…！あわわ…！
× *！ちよつ、ちよつと手違いです。
ええと……………」

「あなた。愛してる …… 俺もだ …… 最後までいかせて …… いくと
きはおまえと一緒にだ …… 出しますか？ …… あなた …… おまえ …… あ
あもうだめ …… ああ …… あああああああ

「……………」

「……………」

「あつあの。ともかく、これにて合同記者発表会を終了致します。

……………」

「おまえ……………もしかして、編集で切った部分を完璧に流してねえか？」

「どうもそんな感じですねえ。どうやら……………。ピンポーンです。

へへ

「ははは。やっぱりなあ。全部流さないから、むしろ話が妙な展開になってるぞ。おまえは本当のアホだなあ。記者達の顔を見ても。はっは

「ははは。いやですよ。編集で切れって言ったのあなたのほうですよ。本当にいやだなあ。はっは。ふざけないでくださいね」

「うわっはっは。愉快的奴だなあ、おまえは。俺もお前もクビだ。クビ！ はっははは

「うわっはっは。あなたも愉快ですね。クビですね。ちょーーんなんてね。はっははは

「ちよんてか。そりゃあ愉快だ。ははは

「いいえ。『ちよん』じゃなくて『ちょーーん』ですよ。ははは

……………」

「ははは。むかつくなあ

「ははは

「むかつきちよんちよん。むかつきちよん！」

「それでもって、お話も、我々も、お・し・ま・い！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0481n/>

CVR（ボイス・レコーダ） in ペちゃくちゃ秋刀魚杯

2010年10月20日20時03分発行